**葉山裁判**

## 葉山裁判

**[ぷぎ](https://www.pixiv.net/users/11284845)**

ここはピクシブ裁判所。  
ここに法律などはない。  
厳密にはピクシブの規定に則ったルールがあるのだが、そんなものはSS書きにも読者にも関係が無い。もっと言えば、原作の俺ガイルの作者、渡航先生も関係が無いくらいなのだ。  
では、なぜここに俺が立っているのか？  
理由は明白だ。

皆に嫌われているのである。

「被告人葉山隼人君。起立」

「はい」

俺は静かに席を立った。  
俺は今、裁判の真っ最中である。  
ここに立たなくてはいけないほどの罪を、果たして負ったのだろうか。  
……負ったのだろうな。  
凄く嫌われているから。

……まいったな。

「さて、あなたの罪なのだけれど……」

雪ノ下さんが罪状を読み上げようとするが、とても白けた顔をしている。  
なぜこんな役をしなくてはいけないのかと言う顔だ。  
しかし、他に適役がいないのだろう。

「最初の罪は、貴方が戸塚君の依頼に割り込んできた時のことよね？」

どうやら俺の過去の行動や言動のあらを探して、断罪したいというのがこのSSの趣旨かも知れない。  
どちらにしても炎上する可能性があるな。  
大丈夫なのか？

……誰かとは言わないが。

「割り込んだなど……誤解もいいところだ。俺たちは純粋にテニスの勝負をした。結果俺たちは負けたが、いい試合だったと思う。それだけじゃダメなのか？」

「どうやらダメなようよ」

雪ノ下さんが後ろを指さす。

俺は刺された方を向く。

「！？」

そこには俺ガイル大好き読者の方々が居並んでいる。

『屑山死すべし！慈悲はない！』  
『DOS!DOS!（ドブに溺れて死ね！）』  
『アンチヘイト！アンチ葉山！』

と連呼している。  
屑山って、俺のことか？一体何をしたというのだ。  
頭を抱える俺をしり目に、雪ノ下さんは裁判を続ける。

「え～……。貴方は戸塚さんが奉仕部に依頼したのにも関わらず、自分たちが楽しみたいがためにテニスコートを明け渡すように強要してきた。とあるわ」

「まいったな。きちんと話し合ったつもりなんだけどね？」

確か話し合いの末に、ダブルスになったはずだったけどな？  
しかし聴衆は許さなかった。

『そんなこと、戸塚が決めるべきだろー！』  
『トップカーストがプレッシャーをかけると、譲らなきゃいけない気持ちになるんだよ！』  
『三浦に良い恰好したいだけだったろ？スケベ根性！』

「……とのことよ」

「まいったな」

本当に困った。たったそれだけのことで裁判沙汰だ。誹謗中傷も度が過ぎるんじゃないのか？

「何か言いたいことはある？」

「まず、最初に……」

要はつるし上げだな。  
全く。いつの時代も変わらないのだろうか。  
例えそうだとしても、俺は変わらない。  
負けるものか。

「……そもそも誰に対しての罪なの？」

「それは……」

『『『比企谷八幡のだよ！』』』

そうか。皆、彼のことを心から愛しているようだな。いいなぁ。羨ましい。

「で、その被害者が俺の弁護人とはいったいどういう事だ？」

俺は俺の弁護士の席に座った男を見る。  
彼の名前はみんな大好き比企谷八幡！  
白目をむきながら、彼は言った。

「知らねえよ。俺に聞かないでくれ」

その言葉を聞いて、少しだけ面白くなった。  
彼の手を借りずに、この現状を打破してみたいという気持ちが強くなった。

「比企谷君。何か言いたいことはある？」

「いいえ。特にありません。と、言うか、現状がよく呑み込めません」

ゲンナリした彼を見ると裁判長の雪ノ下さんは少し嬉しそうだ。  
俺も少しうれしくなった。元気が出てきた。  
さて言おうかな。

「あの試合で、比企谷がどんな不利益を被ったんだい？」

『土下座させようとしただろ！』  
『手柄泥棒！』  
『ギルティ！』

「言っておくが、あのテニスの試合で最もいい思いをしたのは、他ならぬ彼だよ？」

……シーン

そうなのだ。  
あの日の彼は北極星のように輝いてた。  
試合を決め、雪ノ下さんに虚言を吐かせなかった。  
誰もが知ることだ。

「逆に試合をしたことで、彼が得たものを挙げてみようか。  
１つ、戸塚と仲良くなった。  
２つ、結衣の前で格好良かった。  
３つ、結衣を奉仕部sideに引き抜いた。  
４つ、俺たちに勝った。  
５つ、結衣と雪ノ下さんの着替えを覗けた。……最高の結果じゃないか」

……シーン

黙る聴衆。  
決まったな。  
イイこと尽くしなのだ。当然か。  
さて裁判は終わるのかな？と思っていたのだが、思わぬ伏兵が現れた。

「葉山君。少し勘違いをしているわ。私は聴衆のようにはいかないわよ」

雪ノ下裁判長である。  
なぜ、公平を期すべき裁判長の雪ノ下さんが俺を糾弾し始めるのか解らないが、とりあえず頷いて聞く姿勢をとる。

「まいったな。どうぞ」

「あなたたちが来たせいで、困ったこともたくさんあったわ。  
１つ、依頼の邪魔をされた。バカ騒ぎのせいで時間を取られ、戸塚さんを強くするという本来の目的から逸れてしまったわ。  
２つ、由比ヶ浜さんが怪我をしたわ。それに大けがのリスクもあった。テニスで県大会に出るほどの三浦さんのサーブを受けられるのはこの学校で私と、貴方と、そこの男くらいのものよ？  
３つ、そこの男に下着姿を覗かれてしまった。乙女の着替えを覗くなど、言語道断横断歩道。月に代わってお仕置きよ！」

なんか最後の方、ラブコメの波動を感じたんだけど、気のせいかな？  
俺と同じくその波動をキャッチした比企谷は反応を示す。

「おい！俺はその後ラケットを投げられて死にかけたんだぞ！」

「そうよ？貴方のせいで由比ヶ浜さんに暴行傷害、そして下手をすれば奉仕部の業務上過失致死にしかねない恐ろしいことをさせてしまったのよ？まぁ、貴方は気絶だったし、貴方も訴えもしないし病院にもいかなかったから、正当防衛という事で有耶無耶になったけれど」

このままではいつものごとく、八雪的イチャイチャが始まってしまう。  
それだけは避けなくては。

「ちょっといいかな？今の話だと、３つ目は俺には関係のない話じゃないか？雪乃ちゃん」

「雪乃ちゃんなどと、呼ばないでほしいわ！」

「ご、ごめん。雪ノ下さん」

わざと言ったんだよ。9巻で雪乃ちゃんといったのも、わざとだよ。ウッカリ言うわけないじゃないか。陽乃さんに言えと言われたんだよ。そうしないと、『彼を焚き付けられないから～』とかいうものだから、ね。

「コホン。でも１と２に関しては有罪ではないかしら？」

そう言いながら、チラチラと比企谷の反応を確認している雪ノ下さん。  
可愛いなぁ。  
あと比企谷。そんなに睨むな。

「では、あえて言うと、１つ目に関しては俺は俺なりのやり方で戸塚を強くさせる方法があった。それは試合をすることだ。筋肉トレーニングは大事だけれど、即効ではない。まず、試合をして、戸塚のストロングポイントを探して、そこの強化と弱点をあぶりだす必要がある。そこを認識しなければ、効率のいい強化など望めないよ」

孫子の兵法も同じだ。  
相手を知り、己を知れば、百戦危うからず。  
まずは自分の実力の棚卸から始めるべきなのだ。  
まっとうなことを言われ、雪ノ下さんはムキになりだした。

「基礎トレーニングは大事なのよ？」

「その通り。基礎は大事だ。しかし、基礎練習と言うのは日々の反復作業でやるべきであって、認識するべきポイントを覚えるべきだと俺は思う。意識しながら練習をしないと、試合の時にすぐ役には立たないものだよ」

おかしいな。  
こんなこと、本当は彼女もわかっているはずなのに。

「あなたも何か言ったらどうなの！？」

なるほどね。  
そこで、彼に振りたかったのか。  
いいなぁ。可愛いなぁ。  
しかし彼の反応は可愛くなかった。

「だって俺、葉山の弁護士だし。それに、葉山の言っていることは正しい」

「この役立たず！」

「なんでだよ！ふざけんな！ちょっとカワイイからって言っていいことと悪いことが……」

この感じ……っ！ラブコメの波動！？

「ストップ！」

「「！！」」

「話を戻そう。１つ目に関してはOKだね？俺は試合を通して戸塚の急成長を目指したが、その上で上手い方が教えるべきだという事になり、そして君たちが勝った。君たち、あの後戸塚に何か指導をしているのかい？」

「「……あっ」」

「まぁ、いきなり強くはなれないさ。積み重ねが大事なのだと俺は思う。だから勉強し、研究し、練習する。それは、雪ノ下さん、それに比企谷なら、よくわかっているんじゃないか？」

「……そうね」「確かに。早く戸塚の練習手伝わなきゃ」

語るに落ちたと言えることだが、実際に原作でもあれ以来テニスをした記述はない。夏休みにテニスの約束をして、そのままほったらかしている比企谷八幡のことはちょっと耳にしたが、ね。  
まぁ、こんなものかな。もう終わりにしたいし。

「じゃあ、もういいかな？」

「まだよ！由比ヶ浜さんが怪我をした！その点についてはどう思うの！？」

「結衣が俺を訴えるなら解るが、なぜ君がそんなことを言う？」

「決まっているわ。私は彼女の友……、いえ、奉仕部の部長だからよ！」

「そこは『友達』と、ちゃんと口にして言った方がいいと思うよ？妙な建前は雪ノ下さんらしいけれど、そんなこと言ったら、あの時君を頼った結衣が浮かばれないんじゃないか？」

「と、友達よ！///」

頬を染めて怒る雪ノ下さん。可愛いなぁ。  
じんわりと胸が熱くなった。

（良かったね。雪乃ちゃん。友達と呼べる人ができて）

まずは自分が、そう言える人に会えること。それが大事だ。  
結衣は、最高の友達になれると思う。

……しかし、あえて意地悪をしてみようか！！

「そうか。代理戦争なら歓迎しないな。君もそう言うので苦労したことがあるんじゃないのか？」

「由比ヶ浜さんは優しいわ。その優しさに付け込んで、怪我をさせた事実を認めようとしないのは許さない」

「なら、奉仕部はスポーツ系の依頼を受けないのか？君は、依頼相手を選ぶのか？それが奉仕部なのか？」

「くっ……！」

「サッカーだって、テニスだって、怪我は付き物だ。だから怪我をしないように注意する必要がある。しかし怪我が怖くて強くなれるとは思えない。そんな人が戸塚に、どうやってテニスを教えるというのだい？」

追い詰めてみる。  
どんな言葉が飛び出してくるのだろうか。

しかし彼女の口から出た言葉は、俺に向けてではなかった。

「貴方、何とか言いなさいよ！」

言葉に詰まった雪ノ下さんは、比企谷に助けを求めた。  
俺の弁護士だよね？彼は。

「お、俺？俺なの？」

「奉仕部でしょう！？由比ヶ浜さんと私が困っているわよ！？」

そう言って、無理やり振る。  
結衣が言ったわけじゃないから、結衣は困らないはずなのに、あえて二人の連名で彼を動かそうとするのは、決して保身でも、打算でもない。  
彼の行動原理は、自分だけであってはいけない。という彼女の信念なのだろう。  
『二人で』と言うのが彼の行動原理であるべきだと、雪ノ下さんはそう思っている。

それは奉仕部としてでもあり、女としてでもきっとあるのだろう。  
対等であれと。  
それで初めて、友達と言えるのだから。

2人の気持ちを向ける先は決まっている。  
彼だ。

みんな大好き、比企谷八幡！！

そう、察せた瞬間、俺は少し胸が切なくなった。

（良かったね。雪乃ちゃん。許し、甘えられる相手を見つけたんだね）

雪ノ下さんの視線の先を見る。

彼がいる。  
比企谷の胸の中に灯が灯っていくのが解る。  
同じ男なのだ。伝わるものがある。  
焚きつけられたとはいえ、これで立たねば男が廃る。  
その辺りが、比企谷八幡らしいと言える。  
要は、かっこいいと思える。

「解った。任せろ！」

ついに登場か。

俺はどこかでこういう展開を望んでいたと思う。  
彼と、正義をかけて戦う。  
自分の主張。彼の主張。  
聴衆も、裁判長も、彼の味方の状態。  
おまけに彼自身、俺が考えもつかないようなことを考え、そして行動する。

（気を付けないとな）

彼は悠然と席を立ち、雪ノ下さんと見つめ合っている。

そして、静かにうなずいた。

それを見て、雪ノ下さんの表情が変わる。変わっていく。  
白い頬がピンク色に染まっていく。

彼を見ている。見つめている。  
彼は雪ノ下さんから視線を外し、俺を真っ直ぐ見た。

ゴクリ

思わず、つばを飲み込んでいた。  
血が滾ってくる。  
握りしめた拳の中は汗が滲んでいる。  
いや、手の中だけじゃない。  
額にも汗が溜まっている。  
Yシャツの中、背中を汗が這って行く。

「……葉山」

ドキリと胸が高鳴った。

俺を含め、皆が彼の一挙手一投足を注視している。  
彼が何を言うのか。  
彼がどんな行動をとるのか。  
思考の裏側を突かれるかもしれない。

（くそっ！震えているのか？俺は……っ！！）

こっそりと手を伸ばして、自分の尻を抓る。  
口の中で内側の頬を噛む。  
痛みで震えを止めなくては。  
そうじゃなければ、格好がつかない。  
格好つけ野郎！と言われたことを思い出す。  
でも、あの時俺が守らなければ、優美子はきっと怪我をしていた。  
その罪悪感を彼に背負わせたくない。  
傷は治っても、跡は残るから。俺なりの気遣いであり、あくまで俺の行動さ。  
スケベ根性？それもあるさ。認めるよ。  
どんなことを彼が言ったとしても、俺の中の正義は揺るがない。

（さぁ、来い！）

「この度の件！本当にすみませんでした～～～っ！！」

「え？」

「へ？」

『『『『えええええ～っ！？』』』』

何と、彼は膝ついて、土下座した。

「よ、よせよ…。やめろ！そんな、そんなみっともない真似をさせたいわけじゃない！」

俺は慌てて比企谷に駆け寄り言った。  
何とか抱き起して、土下座をやめさせようとするが、跪く彼を抱き起すことはできなかった。

ざわざわ　ザワザワ

騒ぎはだんだん大きくなる。  
聴衆の中には叫び声をあげる人もいる。

雪ノ下さんに至っては顔面蒼白だ。

「よ、よせ！本当にもうよしてくれ！頼む！」

「いいや、葉山！全て俺が悪い！二人はむしろ悪くない！だから許してくれ！頼む！頼むから、俺の大事な雪乃と結衣をいじめないでくれ！もうこれ以上、いじめないでくれ！頼む！！」

そう言って、さらに頭を床にこすりつける。

俺はさらに焦る。  
俺は雪ノ下さんも結衣も、いじめるつもりなどない！  
俺はただ、自分なりの正義を貫こうと……  
しかし、言ったとしてももう遅い。  
このままではまずい！！  
とにかく立たせなくては。  
話をしなくては！  
会話をして、解り合わなくては！

「許す！許すも許さないもないけど、許す！」

おれは一生懸命そう叫んでいた。  
すると、

「……無かったことにしてくれるか？」

「無い！無い！無かった！こんな事、俺の中で許せないことだ！」

嘘偽りない。  
俺は紳士の端くれ。  
比企谷のこんな姿など、誰が許せるものか。

「そうか」

比企谷は土下座をやめて、

ち上り、

俺を見た。

「じゃあ、もう何も問題ないな？」

そう言って、ニヤリと笑う彼。  
禍々しく、陰湿な笑み。

その瞬間、気付く。

（………やられた！！）

俺はそう悟った。

この展開は、まさに彼の望んだ通りの展開だ。

土下座など、彼にとって何でもないことなのだ。

大事なのは、【誰かのために】土下座をするという事だ。

頭を下げられるという事なのだ。

『負けることに関しては俺が最強。それが俺のプライド』と彼に言われた気がした。

俺では決してとることのできない、突出した行動。

行動は、どんな言葉よりも相手の心を打つ。

言葉ではどうやっても敵わない。行動。

相手の気持ちなど、雪ノ下さんの気持ちなど、俺の気持ちなど、聴衆の気持ちなど、ここにいない結衣の気持ちなど、一切省みず、自責に落としてしまう。

（なんてことだ……！）

独り相撲を取らされたような気持になる。  
許さなければ、俺の評価はさらに地に落ち、  
許せば彼の思い通りに事が運ぶ。  
しかも、雪ノ下さんは自分の言ったことを恥じ、彼に対して申し訳ない気持ちを……

「何故土下座なんかしたの！」

案の定、雪ノ下さんが叫ぶ。

「土下座なんかしていない。何もなかったんだから。ただ頭を地面につけて、聖地の方向に祈りを……」

「ふざけないで！あの方角には群馬県しかないわよ！」

群馬もあれば、新潟もある。そして長野もある。  
しかしそんなことはどうでもいい話だ。  
むしろ彼の行動が気になる。

彼は立ち上がり、

ギュッツ

いきなり雪ノ下さんを抱きしめた。

「なっ……っ！？///」

雪ノ下さんの耳元に、口を近づける。

「……判決をどうぞ。裁判長」

そう、雪ノ下さんの耳元で囁く比企谷。  
間違えたように、呟く。  
しかしどこか愛のようなものを感じた。

「……仕方ないわね」

雪ノ下さんは席に戻り、木槌を叩く。

ダンッ

「判決。葉山隼人君は、無罪！」

『『『『『『ええ～～っ！？』』』』』』

「異論がある人は原作を読み直すか、もしくはコメントにて申し立てするように！」

「だってよ。葉山。お前の弁護、成功だな」

ま、まさか。ここまで読んだというのか！？

「き、貴様！まさかそれも狙って！？」

「だってこんなのいつまでも終わらねえよ」

何てことだ。  
終わりにさせるための行動だったのか。  
雪ノ下さんのことを、俺のことを。聴衆のことを。ここにいない結衣のことを。どこかで考えていたのだろうな。  
だから終わりにしなくちゃ。

「そうかも知れないな……」

聴衆からの怒号は、まだ飛び交っている。  
海浜総合高校の玉縄君が、『シャラップ！』と怒鳴って、皆を席につかせようとする。  
後は閉廷を待つだけだったが、そんな中、比企谷は言った。

「そんなことより、今日は誕生日だろう？お前から臨時収入もあるし、ラーメンでも食いに行かないか？」

「いいな。おいしいラーメンを教えてくれ。あと、俺は弁護士費用をいくら払わなくてはいけないんだ？」

「後で請求書を送る」

「今日は誕生日なんだけどな？」

カンカンッ

「静粛にっ！まだ終わっていないわよ！」

比企谷との会話に夢中になってしまい、雪ノ下さんの話を聞きそびれてしまった。

「比企谷君。貴方は有罪！」

「えええええ～っ！？」

「罪状は私の心を盗んだ罪よ」

「あんまりだ！上告します！」

「棄却します」

しまった。八雪のための伏線だったのか。やれやれ。

後は幸せな二人に任せるとしよう。

雪乃ちゃん。幸せに。俺よりいい人がいるなら、それでいいのさ。

俺は一人静かに席を立ち、法廷を後にした。

千葉駅に着いた時、携帯電話の着信が鳴る。

Pillllllllllll

「はい。もしもし」

『おい。ラーメン喰うんだろ？』

「比企谷！？約束を守るのか？」

『今から、指定した場所に来い。場所は○×△……』

「仕方ないな。今すぐ行くよ」

それほど遠い場所じゃない。  
俺は走って、その場所を目指した。  
たどり着いた目的地。  
そこはカラオケルームだった。

まさか……

名前を言って、部屋に案内され、扉を開けた瞬間。

ガチャッ

『『『『『『Happybithday!!』』』』』』

パンッ　パンッ　パーンッ

クラッカーの破裂する音が響く。

そこには優美子・姫菜・戸部・大和・大岡がいた。  
他にも、材木座・戸塚・川崎さん・結衣・雪ノ下さん・陽乃さん・平塚先生  
さらに、折本さん、仲町さん、玉縄。

そして……、

「……おめでとう」

鶴見留美がいた。

「留美ちゃん！？」

なぜ彼女がここに！？

「俺が呼んだ」

声の主は比企谷八幡。  
鶴見留美ちゃんは怯えている。

「は、八幡。本当に大丈夫なの？彼、変なことしない？」

怯えながら、俺を警戒する鶴見さん。  
ぼかぁ、別に変なことをしていないのだけどね？

「さぁ？」

さぁ？って何だ！俺はロリコンじゃないぞ！  
でもまずは、皆にお礼を言わなくては。

「コホン。みんな。ありがとう。とてもうれしいよ」

素直にうれしい。  
複雑な気持ちもあるけど、嬉しい方が勝る。

みんなジュースで乾杯をして、ケーキを食べて、歌を歌った。  
大盛り上がりの後、平塚先生が言った。

「さぁ、珍しい顔ぶれで宴もたけなわプリンスホテル！だが、ここで比企谷から一言」

そう言って、彼を促す。

「コホン。ではみんな。準備はいいか？」

「「「「「「OK」」」」」」」

なんだ？何が始まる？  
楽しみだ。  
彼の趣向を堪能しよう。

「それでは、これから葉山裁判を始める！！」

「！？」「「「「「「Yehaaaaaa!!」」」」」」」

「検察側の結衣さん。罪状を」

「チェーンメール事件！！」

なんだい？とことん俺を掘り下げようというのか？  
いいだろう。とことんやってやろうじゃないか！！

こうして俺の裁判はまだまだ続いた。

おわり

附机翻：

审判叶山

这里是pixiv法院。

这里没有法律。

严格地说，这是根据pixiv的规定而制定的规则，但这种规则与读者无关。进一步说，甚至连我这个原著作者——渡航老师都没有关系。

那么，我为什么会站在这里呢?

理由显而易见。

大家都讨厌我。

“被告人叶山隼人君，起立。”

“是的。”

我静静地站了起来。

我现在正在进行审判。

他真的背负了必须站在这里的罪责吗?

……应该是受了伤吧。

因为他非常讨厌我。

……糟了。

“那么，这是你的罪过……”

雪之下想要宣读罪状，但脸色苍白。

一副“为什么非演这种角色不可”的表情。

但是，大概没有其他合适的角色吧。

“第一起罪，是你参与户冢委托的时候吧?”

看来SS的宗旨就是找出我过去的行动和言行的漏洞，然后定罪。

不管怎么说，都有可能会起火。

不要紧吗?

……虽然没说是谁。

“插话什么的……误会也没什么。我们纯粹是在打网球。虽然结果我们输了，但我觉得这是一场精彩的比赛。仅仅这样不行吗?”

“看来不行。”

雪下小姐指了指身后。

我转向被刺的方向。

“! ?”

我最喜欢的读者们都在那里排队。

“渣滓山该死!没有慈悲!”

“DOS!DOS!(淹死在水沟里!)”

“反兵!反叶山!”

连呼着。

渣滓山，指的是我吗?到底做了什么?

面对抱头的我，雪下继续审判。

“嗯……上面写着，户冢先生把网球场委托给了服务部，可是你却为了让我们开心而强行让出了网球场。”

“糟了，我本来打算好好谈一谈的。”

我记得商量之后，应该是双打的吧?

但是听众没有原谅。

“这种事应该由户冢来决定!”

“最高层给自己施加压力的话，就会产生不得不让步的心情!”

“只是想打扮成三浦的样子吧?好色的本性!”

“就是……”

“糟了。”

真的很困扰。就这么简单的事就要打官司了。诽谤中伤也太过分了吧?

“有什么想说的吗?”

“首先，一开始……”

关键是吊起来。

真是的。任何时代都不会改变吗?

即使是这样，我也不会改变。

怎么能输呢?

“……到底是对谁犯下的罪?”

“这是……”

“‘比企谷八幡的!’”

是吗?大家好像都很爱他。真好啊。真羡慕。

“那么，那个被害者是我的辩护人，这到底是怎么回事?”

我看着坐在我律师座位上的男人。

大家都很喜欢他的名字比企谷八幡!

他翻着白眼说。

“我不知道，别问我。”

听了这句话，觉得有点意思。

不借助他的手，打破这种现状的想法变得强烈了。

“比企谷君，有什么想说的吗?”

“没有，没有什么特别的。应该说，我不太了解现状。”

看着沮丧的他，审判长雪下似乎有些高兴。

我也有点高兴了。打起精神来了。

那么要说吗?

“那场比赛，比企谷吃了什么亏?”

“你不是想让他下跪吗?”

《偷功!》

“吉尔蒂!”

“我先告诉你，那场网球比赛中，印象最深刻的就是他。”

……场景

没错。

那天的他像北极星一样闪闪发光。

决定了比赛，不让雪下说假话。

谁都知道。

“反过来说，通过比赛他得到了什么?

第一，和户冢关系变好了。

两个，在结衣面前很帅。

三个，把结衣拉到服务部side。

赢了我们4个。

看到了结衣和雪下小姐换的5件衣服。……这不是最好的结果吗?”

……场景

沉默的听众。

决定了。

尽了一切好事。当然了。

那么审判结束了吗?正想着，却出现了意想不到的伏兵。

“叶山，你有点误会了，我可不能像听众那样。”

他就是雪下审判长。

虽然不明白理应公平公正的审判长雪下先生为什么要开始声讨我，但还是先做出了点头倾听的姿势。

“不好意思，请进。”

“因为你们的到来，我遇到了很多麻烦。

一件事，我的委托被打扰了。这场闹剧耽误了我很多时间，也偏离了让户冢先生变强的初衷。

有两个，由比滨受伤了。而且还有受重伤的风险。在这个学校里，能接受参加县里网球比赛的三浦先生发球的，只有我、你和那个男人吧?

3、那里的男人偷窥了我的内衣。偷看少女换衣服，简直是荒唐的人行横道。我要代表月亮惩罚你!”

最后，感觉到了爱情喜剧的波动，是错觉吗?

和我一样，比企谷也捕捉到了这种波动。

“喂!那之后我被人扔了球拍，差点死掉!”

“是啊，都是因为你，才让由比滨遭受暴力伤害，搞不好还会造成服务部业务过失致死的可怕事情。不过，你当时已经昏厥过去了，你也没有报案，也没有去医院，所以就以正当防卫的罪名不了了之了。

再这样下去，八雪的调情又要开始了。

这一点一定要避免。

“可以吗?照你刚才说的，第三件事应该和我无关吧?雪乃。”

“不要叫我雪乃!”

“对不起，下雪了。”

我故意说的。第9卷里叫雪乃也是故意的。不可能不小心说出来的。是阳乃让我说的。如果不这样做的话，就会说‘因为无法点燃他~’，对吧。

“好了，但是1和2不是有罪吗?”

雪之下一边说，一边观察比企谷的反应。

好可爱啊。

还有比企谷。别这么瞪我。

“那么，关于第一点，我有自己的方法让户冢变强，那就是比赛。肌肉训练虽然重要，但不是立竿见影的。首先要通过比赛寻找户冢的亮点，找出他的弱点和强化点。如果不能认识到这一点，就无法实现高效率的强化。”

孙子兵法也是一样。

知己知彼，百战不殆。

首先应该从盘点自己的实力开始。

听了这么正经的话，雪下小姐开始生气了。

“基础训练很重要吗?”

“没错。基础很重要。但是我认为基础练习应该是每天重复的工作，应该记住应该认识的要点。如果不有意识地练习，比赛的时候是不会马上派上用场的。”

好奇怪啊。

这种事，其实她也应该明白的。

“你也说点什么怎么样? !”

原来如此。

所以，想甩给他吗?

真好啊。好可爱啊。

但是他的反应并不可爱。

“因为我是叶山的律师，而且叶山说的都是对的。”

“你这个没用的家伙!”

“为什么啊!开什么玩笑!有点可爱就说什么好，什么不好……”

这种感觉……!爱情喜剧的波动!?

“停!”

““! !”

“言归正传。关于第一点，OK吧?我的目标是通过比赛让户冢快速成长，但在此基础上，我决定由擅长的人来教他，最后你们赢了。你们在那之后指导户冢什么了吗?”

“啊……”

“嗯，不可能一下子就变强。重要的是积累。所以要学习、研究、练习。这一点，雪下，还有比企谷应该很清楚吧?”

“确实。我得快点帮户冢练习。”

可以说是言过其实，实际上原作中也没有关于打网球的记载。我听说了比企谷八幡暑假时约好打网球，后来就不管了。

嗯，大概是这样吧。我想结束。

“那么，可以了吧?”

“还没!由比滨受伤了!你怎么看这一点?”

“结衣告我的话我还能理解，但你为什么要这么说?”

“那还用说。我是她的朋友……不，是服务部的部长!”

“我觉得还是把‘朋友’这个词挂在嘴上比较好吧?听起来好像是很奇怪的场面话，可要是这么说的话，当时投靠你的结衣不就不高兴了吗?”

“和、朋友! ///”

雪下满脸通红。好可爱啊。

我的胸口一阵发热。

(太好了。雪乃。有了可以称为朋友的人)

首先，自己要遇到能这么说的人。这很重要。

我觉得结衣会成为最好的朋友。

……但是，硬要试着坏心眼一下吗! !

“是吗?我不欢迎代理人战争。你也这么说，是不是吃了不少苦?”

“由比滨你很温柔，我不能原谅你利用你的温柔不承认让你受伤的事实。”

“那么，服务部不接受体育方面的委托吗?你会选择委托对象吗?那是服务部吗?”

“咳……”

“足球也好，网球也好，受伤都是难免的，所以必须注意不要受伤。可是，我不认为害怕受伤就能变得坚强。这样的人，怎么教户冢打网球呢?”

试着穷追不舍。

会说出什么样的话呢?

但她说的话并不是对我。

“你说点什么啊!”

雪下女士一时语塞，向比企谷求助。

你是我的律师吧?他是。

“哦，我?是我吗?”

“是服务部吧? !由比滨和我遇到困难了! ?”

说着，勉强摆了摆。

这不是结衣说的，所以结衣应该不会为难他，但他硬要用两人的联名来打动他，这绝不是明哲保身，也不是什么算计。

他的行动原理不能只针对自己。这是她的信念吧。

“两个人”应该是他的行动原理，雪下是这么认为的。

不管是作为服务部，还是作为女人，肯定都有。

对等。

因为只有这样才能称得上是朋友。

两个人的感情指向的方向是固定的。

是他。

大家都很喜欢比企谷八幡! !

是啊，察觉到的瞬间，我的心有点难过。

(太好了。雪乃。找到可以原谅、撒娇的对象了。)

我顺着雪下小姐的视线看去。

有他在。

比企谷的心中亮起了灯。

同样是男人。有传达的东西。

虽说被点燃了，但如果不站起来，男人就废了。

这就是比企谷八幡的风格。

关键是觉得很酷。

“我知道了，交给我吧!”

终于登场了吗?

我想我在某个地方希望这样的展开。

和他，赌上正义战斗。

自己的主张他的主张

听众和审判长都站在他这边。

而且他自己还会想一些我想都不敢想的事情，然后采取行动。

(可得小心啊)

他悠然地站起身，和雪下小姐对视着。

然后，静静地点点头。

看到这个，雪下的表情变了。发生变化。

白皙的脸颊染上了粉红色。

我看着他。注视着。

他把视线从雪下小姐身上移开，直视着我。

咕噜

我不由得咽了口水。

热血沸腾。

紧握的拳头里渗出了汗水。

不，不只是手里。

额头上也积满了汗水。

汗水爬过Y恤衫的后背。

“……叶山。”

我的心怦怦直跳。

包括我在内，大家都注视着他的一举一动。

他说什么呢?

他会采取什么样的行动?

说不定会被戳到思考的另一面。

(可恶!你在颤抖吗?我……! !)

我偷偷地伸出手，掐了掐自己的屁股。

嘴里咬着内侧的脸颊。

必须停止因疼痛而颤抖。

否则就不体面。

耍帅的家伙!我想起了他说的话。

但是，如果当时我不保护她，优美子一定会受伤的。

我不想让他背负这种罪恶感。

就算伤口好了，也会留下痕迹。这是我的顾虑，终究是我的行动。

好色癖好?这也是原因之一。我承认。

不管他说什么，我心中的正义都不会动摇。

(来，来吧!)

“这次的事!真的很抱歉~ ~ ~ ! !”

“什么?”

“什么?”

『『『『诶诶诶~ ! ?』』』』

他突然跪下，跪在地上。

“不要，不要……不要!我不是想让你做那种不体面的事!”

我慌忙跑到比企谷说。

我想把他抱起来，让他停止跪地，却没能抱起跪着的他。

哗啦哗啦

闹得越来越大。

听众中有人叫出声来。

至于雪下，则脸色苍白。

“不要!真的不要了!求你了!”

“不，叶山!一切都是我的错!你们两个反而没有错!所以原谅我吧!拜托!拜托你了，不要再欺负我最重要的雪乃和结衣了!不要再欺负我了!拜托! !”

说着，又把头往地板上蹭了蹭。

我更着急了。

我不打算欺负雪下和结衣!

我只想坚持自己的正义……

但是，说了也已经晚了。

这样下去可不妙! !

总之必须让他站起来。

必须说话!

必须进行对话，互相了解!

“我原谅你!我没有原谅不原谅你，我原谅你!”

我拼命地叫着。

于是，

“……你能说没有吗?”

“没有!没有!没有!这种事，在我心中是不能原谅的!”

没有说谎。

我是绅士。

比企谷这副模样，谁能容忍?

“是吗?”

比企谷停止下跪。

站起来，站起来，

看着我。

“那么，已经没有什么问题了吧?”

说着，他微微一笑。

阴险的笑容。

就在那一瞬间，我注意到了。

(…………被打败了! !)

我明白了。

这正是他所期望的发展。

下跪对他来说根本不算什么。

重要的是“为了谁”下跪。

是被低下头的事。

他好像对我说:“关于失败，我是最强的，这是我的自尊心。”

这是我绝对无法做出的突出行为。

行动比任何语言都能打动对方的心。

在语言上无论如何也敌不过。行动。

对方的心情，雪下的心情，我的心情，听众的心情，不在这里的结衣的心情，一切都不反省，陷入自责。

(天啊……!)

感觉自己好像被人抢走了相扑。

如果不原谅，对我的评价就会一落千丈。

如果允许，事情就会按他的意思进行。

而且，雪下小姐对自己说的话感到羞耻，对他感到抱歉……

“为什么要下跪?”

不出所料，雪下小姐叫道。

“我没有下跪，因为什么都没有发生过。我只是头贴地，朝着圣地的方向祈祷……”

“别开玩笑了!那个方向只有群马县!”

既有群马，也有新潟。还有长野。

但这些都无所谓。

我反而很在意他的行动。

他站了起来，

紧紧

突然抱紧了雪下小姐。

“啊……! ? ///”

我把嘴凑到雪下的耳边。

“请听判决，审判长。”

对，比企谷在雪下小姐耳边低语。

他像是弄错了似的嘟囔着。

但又感到一种类似爱的东西。

“……没办法啊。”

雪下小姐回到座位上，敲起木槌。

邓

“判决。叶山隼人君无罪!”

『『『『『『诶~ ~ ! ?』』』』』』

“有异议的人请重读原作，或者在评论中提出申述!”

“叶山，你的辩护成功了。”

不会吧。你竟然读到这里了!?

“你、你!难道你也瞄准那个? !”

“因为这样的事情永远都不会结束。”

怎么回事?

是为了结束而采取的行动吗?

雪下小姐的事，我的事。听众的事。结衣不在这里。大概是在想什么吧。

所以必须结束。

“也许吧……”

听众的怒号还在飞来飞去。

海滨综合高中的玉绳君，在《夏洛普!大吼一声，想让大家坐下。

接下来就等着法庭闭会了，在这种情况下，比企谷说道。

“先不说这个，今天是你的生日吧?我还有你的临时收入，要不要去吃碗拉面?”

“好啊，告诉我好吃的拉面。还有，我得付多少律师费?”

“稍后发送账单。”

“今天是你的生日吧?”

咯吱

“肃静!还没结束呢!”

我沉浸在和比企谷的对话中，没能听清雪下小姐的话。

“比企谷君，你有罪!”

“哎哎哎哎~ ~ ? !”

“罪名是偷了我的心。”

“太过分了!我要上诉!”

“我驳回。”

糟了。是为八雪埋下的伏笔吗?哎呀呀。

剩下的就交给幸福的两个人吧。

雪乃。祝你幸福。有比我好的人就行了。

我一个人静静地站起来，离开了法庭。

刚到千叶站，手机响了。

pillllllllllll

“喂，喂。”

“喂，你要吃拉面吧?”

“比企谷? !你要遵守约定吗?”

“现在到你指定的地方来，地点是〇×△……”

“没办法，我现在就去。”

不是很远的地方。

我跑向那个地方。

到达的目的地。

那里是卡拉ok室。

难道……

报上名字，被带进房间，打开门的瞬间。

咔嚓

『『『『『『Happybithday!!』』』』』』

哗啦哗啦哗啦

响起了饼干破裂的声音。

那里有优美子、姬菜、户部、大和、大冈。

其他还有材木座、户冢、川崎、结衣、雪下、阳乃、平冢老师

还有折本先生、仲町先生、玉绳先生。

然后……,

“恭喜……”

鹤见留美在。

“留美? !”

她为什么会在这里!?

“是我叫的。”

声音的主人是比企谷八幡。

鹤见留美很害怕。

“哈，八幡。他真的没事吗?不会做什么奇怪的事吧?”

鹤见一边害怕，一边警戒着我。

我并没有做什么奇怪的事。

“是吧?”

是吧?什么啊!我不是萝莉控!

不过，首先得向大家道谢。

“咳，谢谢大家。我很高兴。”

我真的很高兴。

虽然也有复杂的心情，但还是开心的一方。

大家用果汁干杯，吃蛋糕，唱歌。

热烈的气氛过后，平冢医生说道。

“来吧，难得有这么多人来参加宴会!不过，在这里，比企谷先说一句。”

说着催促他。

“好了，大家准备好了吗?”

「「「「「「OK」」」」」」」

怎么回事?什么开始?

真令人期待。

让我们尽情享受他的趣味吧。

“那么，现在开始叶山审判! !”

“! ?”「「「「「「Yehaaaaaa!!」」」」」」」

“检方的结衣先生，罪状?”

“连环邮件事件! !”

什么事?你是想彻底挖掘我吗?

好吧。要不要做到底! !

就这样，我的审判还在继续。

结束